淡路島文化財総合調査（一九八八～二〇〇〇）と成果集成について

神戸佳文

はじめに

兵庫県立歴史博物館は、昭和五八年（一九八三）四月の開館以前の博物館設立準備室の時から、活動方針の一つとして、兵庫県内に伝わる文化財をいろいろな分野から調査する総合調査を実施してきた。これは歴史・民俗・美術・考古等の担当者が、市、郡単位のエリアで市町の教育委員会の協力を得て行うもので、寺院、神社、旧家等に伝来する資料、地域に伝わる民俗行事などを調査し、また、一寺院を対象にするときは、各堂宇、庫裏の資料、年中行事などを調べていく。調査で得られたデータをもとに、特別展・企画展を開催してその成果を公表し、さらに補足調査を行い「調査報告書」を刊行して調査の完了とした。

一　調査方法について

調査時は三、四人でチームを組み、博物館のワゴン型公用車に機材一式を載せて、現地に三・四日ほど滞在し、資料名、材質、法量、年代等を「調査カード」に記入し、そのカードに、三五ミリ銀塩フィルムで撮影した写真プリントを貼り付けて、調査場所、ジャンル等に分けてファイルに閉じる。資料カードのデータを基に、展覧会の計画を進め、展覧会図録の作成、報告書の編集を行った。なお、報告書作成のために補足調査を加える場合もあった。

これらの作業は、現在ではデジタルカメラによる撮影、多量の画像データ、調査データをパソコンによって保存し、データの集成、分類、資料カードの編集などが、比較的容易に作成できるように

なったが、当館が総合調査をおこなっていた年代では、すべてアナログ的な方法で実施していた。調査の内容を記した調査カードは、地域、所蔵先、ジャンル等に整理してファイルに綴って保管している。

二　これまで実施した総合調査について

博物館準備室時代に、研究活動の一環として総合調査を実施していく方針は、当時関西の歴史系博物館の先達として、当館が目指す方向について指導と助言をいただいていた大阪市立博物館（現大阪歴史博物館）の活動を基礎にしている。総合調査の成果を展覧会で紹介する形式は、大阪府下のみでなく隣接する府県の調査、展覧会も実施されていた。

当館が一回目の総合調査の対象としたのは、加西市坂本町にある天台宗の古刹法華山一乗寺である。ここを初回にしたのは、博物館が立地する姫路から近距離であり、国宝、重要文化財が多く所蔵されているが、古文書など未調査の資料がまだ多く所在していたことが理由であったと記憶している。そして、仏教絵画として県内唯一の国宝である「絹本著色聖徳太子及び天台高僧像」一〇幅や重要文化財の仏画等は、県外の博物館、美術館に寄託されており、調査成果の発表の場である特別展の折に、兵庫県へ里帰りさせて当館で展示を行いたいという意図もあった。

調査の初年度は博物館準備室時代の昭和五七年（一九八二）の夏で、このときは学芸員に仏教美術の調査の経験者がいなかったので、奈良大学教授毛利久氏と神戸商科大学名誉教授東郷松郎氏に直接ご指導をいただき、所蔵されている資料の場所と概要を調べて、次年度に本調査を行うための予備調査とした。そして二年目にワゴン型公用車で連日出動して六日間にわたる調査を行った。この調査の成果を、開館二年目の昭和五九年（一九八四）の秋に特別展で紹介し、翌六〇年度に『総合調査報告書』を刊行した。『総合調査報告書』の作成についても、当館で経験がないため、滋賀県草津市教育委員会が作成した『芦浦観音寺文化財調査報告書（一）』（一九八三）を参考に編集し

ている。

当館のこれまで実施してきた総合調査の概要については、これまで詳細に述べたものがなく、この『ひょうご歴史研究室紀要』に、『淡路島文化財総合調査報告書』の作成経緯を述べるにあたり、これまでに行った調査、展覧会、報告書刊行の時期を当館の『館報』を基に記録に留めておきたい。

三　総合調査による展覧会・報告書一覧

1「法華山一乗寺」　加西市

予備　昭和五七年七月二八～三〇日　延一五人

本調査　昭和五八年七月二六～三一日　延四三人

特別展　昭和五九年一〇月六日～一一月二五日

報告書　昭和六〇年一〇月発行

2「西脇市・多可郡（中町・加美町・八千代町・黒田庄町）」　現西脇市・多可町

本調査　昭和五九年

西脇・中　七月二四～二七日

西脇・黒田庄　七月三一～八月三日

黒田庄・加美　八月二八～三一日

八千代・加美・中　九月四～七日

西脇・黒田庄・八千代　一〇月九～一〇日

延七〇人

特別展　昭和六〇年七月二〇日～九月八日

報告書　昭和六二年三月発行

3「書写山円教寺」　姫路市

本調査　昭和六〇年八月～六一年一月　延一九日

特別展　昭和六一年四月一九日～六月八日

報告書　昭和六三年三月発行

4「出石郡（出石町・但東町）」　現豊岡市

予備　昭和五九年一一月二〇～二二日　延九人

本調査　昭和六〇年一〇月二九～一二月一六日

延一七日　六九人

企画展　昭和六二年一〇月三日～一二月六日

報告書　平成五年三月発行

5「瑠璃寺」（佐用郡南光町）　現佐用町

本調査　昭和六一年五月二七～二九日

七月二三～二五日　延二〇人

企画展　昭和六二年八月一日～九月一五日

報告書　平成一四年三月発行

6「三田市・猪名川町」

予備　昭和六〇年二月三日～三月二五日
延一三日・二四人
本調査　昭和六二年
猪名川　八月四・五、二五～二七日
一一月一〇～一三日
三田　一〇月三・四、九・一〇、一三～一五、
二二～二四、二七～二九日
一一月四～六、一〇～一三、
一九～二一日
昭和六三年一月二〇～二二日、
二月四～六、一六日　延一〇二人
三田市特別展　昭和六三年四月一六日～六月五日
三田焼企画展　同年四月一六日～六月二六日
猪名川町企画展　平成二年一月二七日～三月四日
報告書　未刊

7「津名郡」　後述

8「鶴林寺」（加古川市）
本調査　平成二年一一月一四～一六日
同月二〇・二二日　延三九人
特別展　平成三年七月一三日～九月一日
報告書　未刊

9「氷上郡六町（柏原・氷上・青垣・春日・山南・市島）」現丹波市
本調査　平成三年
春日　一一月七～九日、一二～一四、
一九～二一日
氷上　同四年　二月一九～二一、二五～二七日
市島　同四年一〇月六～八、一四～一六、
二〇～二二、二七～二九日
青垣　同四年一一月一七～一九、一二月一～三、
九～一一日、
同五年　二月二三～二五日
柏原　同五年　三月二～四、九～一一、
一六～一八日
山南　同六年　二月二二～二五、三月一～四日
延一八〇人
特別展　未開催、報告書　未刊

四　総合調査にかかる諸問題

三回目までは、順調に進んだが、四回目は報告書作成に五年、五回目は寄託された瑠璃寺大般若

経六〇〇巻の奥書の調査のため刊行に一五年を要し、六回目は、猪名川町報告書の編集までは行ったが、三田市報告書の編集が未成のため刊行に至っていない。その理由は、調査→展覧会→報告書作成を限られたメンバーでやっていくと、調査・展覧会は、年間スケジュールに組込まれて実施していくが、報告書の作成は、展覧会が優先されるため、編集が間に合わなくなり、刊行が滞ってくることによる。さらに展示室のリニューアルによりギャラリー（特別展示室）の面積が二倍になり、展覧会の規模が大きくなって準備から完了にかかる時間が増えたことも影響していると思われる。

五　淡路島調査を巡る状況について

淡路の調査については、当時の洲本市と津名・三原郡のそれぞれの市、郡域で調査して展覧会、報告書の刊行を計画していた。そのため七回目の総合調査として、まず「津名郡（現淡路市と洲本市五色町）」調査を昭和六二～四年度（八七～九）に実施した。

予備調査　昭和六三年三月九～一二日　延八人
本調査　昭和六三年　延三〇人
　津名町　五月一七～二〇日
　津名・東浦町　八月五～七日
　五色町　一〇月一九～二〇日
本調査　平成元年　延四四人
　一宮町　四月二六～二八日
　北淡町　五月二四～二六日
　淡路町　六月七～九日
　北淡・一宮町　六月一三～一五日

展覧会の開催については、計画の見直しにより、津名郡のみでなく、淡路全体の調査を終えてから開催することになった。そのため、前述したように「鶴林寺」を、平成二年度（九〇）に八回目として調査を実施し、翌三年度に特別展を開催した。九回目は旧五か国の最後として「氷上郡」を平成三～五年度（九一～三）に調査したが、特別展を計画中の平成七年（九五）一月一七日、阪神・淡路大震災が発生したことにより、特別展の開催は凍結され、その後の総合調査も休止状態となった。

震災直後は、文化財の被害状況の確認と文化財

レスキューが急務となった。津名郡の調査を行っていたため、そのデータを基に、平成七年二月二一～三日に津名・一宮・五色町、震源地に近い北淡町は同年五月一六・七日に文化財の現状確認を行い、その間に一宮町の旧家の文化財レスキューにも参加した。

六　三原郡・洲本市の調査と特別展の開催

「震災からの復興」を位置付けるための兵庫県の施策として淡路島全体の文化財を紹介する展覧会が計画された。それを実施するため、未調査であった三原郡（現南あわじ市）と洲本市の総合調査を開始した。

三原郡　平成八年度　延四八人
緑町　一〇月二九日～一一月一日
三原町　一一月六～八日、二〇～二二日
二七～二九日、一月一〇～一二日
三原郡　平成九年度　延五八人
南淡町　平成一〇年一月二〇～二三日
一月二八～三〇日、二月三～六日
西淡町　三月四～六日、三月一〇～一三日
洲本市　平成一〇年度　延三六人
一〇月二七～二九日、
一一月一～一〇～一二日、一七～一九日
一二月一～三日

そして、津名郡と合わせた成果をまとめて、兵庫県立歴史博物館ではなく、洲本市立淡路文化史料館にて、特別展「海と山と花の国―淡路の歴史と文化―」（会期　平成一二年（二〇〇〇）四月二九日～六月一一日）として調査の成果を公表した。

七　淡路島調査における今後の展望と課題

現在、淡路島調査を始めて三〇余年が過ぎ、特別展は開催できたが、その後に編集すべき報告書の作成には前述したような理由で手を付けていない状況であった。このたび、ひょうご歴史研究室による淡路の歴史にかかる研究の一環として、調査カードのデータ化と目録作成が行われた。再確認段階で、新たな発見があったが、すでに所在不明の資料もあり、現時点の報告書として刊行され

る次第となった。

淡路調査を津名郡から始めたことにより、阪神・淡路大震災直後の文化財レスキューや所在確認調査の基礎データとなった。今後想定される「南海トラフ地震」や近年増えている突発的な大水害等に備なえておくためにも、より精度の高い報告書の作成が必要であろう。そのために、今後再調査の実施と増補となる報告書の編集、発行が期待されるが、この書が今後の淡路研究のさらなる進展の基礎となることを願うものである。

調査風景１

調査風景２

調査風景３